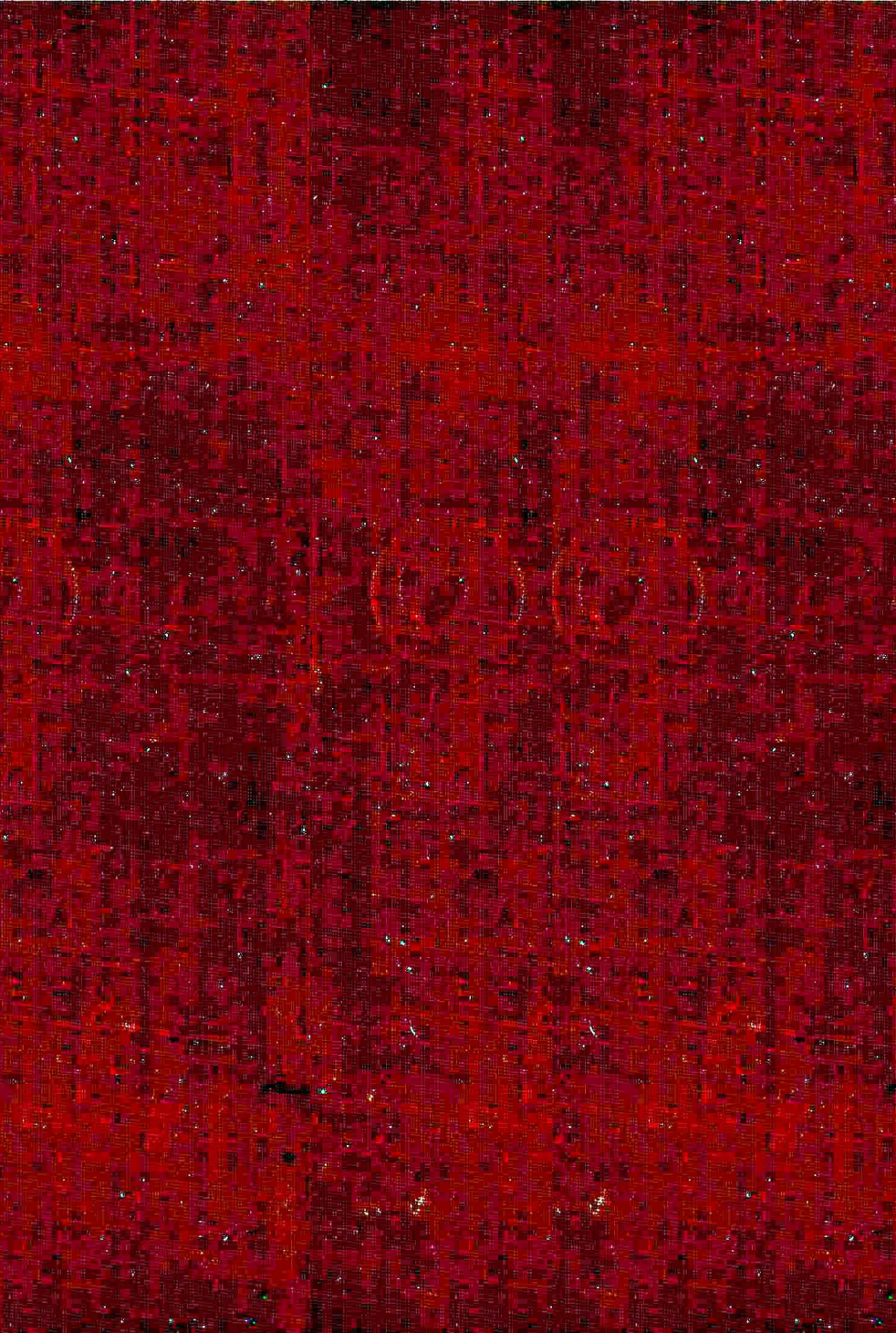




ストリンドベリ名作集

一九七五年八月一日印刷
一九七五年八月二七日発行

訳者略歴

毛利三彌(もうり みつや)
一九三七年生、一九六五年カリフォルニア大
大学院卒
演劇学専攻、成城大助教授
千田是也(せんた これや)
一九〇四年生、俳優座所屬、桐朋学園大教授
岩淵達治(いわぶち たつじ)
一九二七年生、一九五一年東大卒
独文学・演劇学専攻、学習院大教授
石沢秀二(いしざわ しゅうじ)
一九三〇年生、一九五五年早大大学院卒
演劇評論・比較演劇専攻、桐朋学園大助教授
高橋康也(たかはし やすなり)
一九三三年生、一九五三年東大卒
イギリス近代詩・演劇専攻、東大助教授

訳者

©

毛 千 田 利 三 彌
岩 淵 達 治 也
石 沢 秀 康 也
高 橋 康 也
寺 村 五 一
山 岸 晨
印刷者
発行所
株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(密)七八二一(代)
振替東京 九一三三二八
郵便番号 一〇二

三秀舎印刷・加瀬製本

(分) 0097 (整) 53200 (出) 6911

ス、

Johan August Strindberg

*

Fadren

Fröken Julie

Till Damascus I

Brott och brott

Dödsdansen

Spöksnaten

ストリンドベリ名作集

毛利三彌 千田是也

岩淵達治 石沢秀二

高橋康也

訳



目次

父	毛利三彌訳	7
令嬢ジュリー／付序文	千田是也訳	55
ダマスカスへ 第一部	岩淵達治訳	109
罪また罪	石沢秀二訳	198
死の舞踏 第一部・第二部	毛利三彌訳	253
幽霊ソナタ	高橋康也訳	347
作品解説	毛利三彌	383

父

毛利

三彌

訳

人物

大尉

ラウラ（彼の妻）

ベルタ（彼らの娘）

ドクトル・エステルマルク

牧師

乳母

ネイド

従卒

第一幕

大尉の家の居間。右手奥にドア。中央に新聞や雑誌の置いた大きなまるとテーブル。右手に革ばりのソファとテーブル、右手隅に壁紙のはったドア。左手には振り時計ののった机、外の部屋に通じるドア。壁には銃がかかっている。狩の袋や猟銃。制服をかけた衣裳掛けがドアの側に立っている。大きなテーブルの上のランプがともっている。

第一場

革ばりのソファに、大尉と牧師がすわっている。大尉は通常軍服で拍車つきの乗馬靴。牧師は黒衣で牧師襟の代わりに白いネクタイをしている。彼はパイプを吸っている。

大尉が呼鈴を鳴らす。

従卒 お呼びですか、大尉殿？

大尉 ネイドはいるかい？

従卒 台所におります。ご命令を待って。

大尉 また台所か！ すぐにここへつれてこい！

従卒 かしこまりました、大尉殿。(去る)

牧師 どうしたんだね、一体？

大尉 また女中に悪さをしたんですよ、あのろくでなし、まったく仕方のない奴だ！

牧師 ネイド？ あの男は去年の春にもたしか！

大尉 ええ、おぼえてるでしょう！ どうか優しくさとしてみてくれませんか。どうもそのほうがいい。わたしはがみがみ言ったし、撲りつけてもみたんですがね、さっぱり効きめがないんですよ。

牧師 で、お説教というわけか。騎兵隊の若者が神のお言葉でどうかなると思うかね。

大尉 そりゃあ、義兄さん、わたしには効きめはないでしょうが――

牧師 わかっているよ！

大尉 でも、あの男になら！ とにかくやってみてくれませんか。

第二場

前場の人物。ネイド。

大尉 ネイド、一体きさまは何をしたんだ？

ネイド 何をつて、大尉殿、牧師様の前ではちよつと。

牧師 気にしないでいいよ、おまえ！

大尉 正直に言うんだ。さもないと、どんな目に会うかわかつてるだろうな。

ネイド わかつておりますよ。まあ、話はこうなんで。自分たちはガブリエルでダンスをしてたんで。そして、そして、ルードヴィが言うには――

大尉 ルードヴィに何の関係がある？ 本当のことを言うんだ。

ネイド はい、そして、エムマが言うには、いっしょに納屋へ行こうつて。

大尉 ふん、たぶん、エムマのほうがおまえを誘惑したつてわけだな？

ネイド ええ、まあ、そういったようなことなんで。それに正直申しまして、女が望まなきや、何も起こりはしないんで。

大尉 はつきり言え。おまえは赤ん坊の父親なのか、違うのか？

ネイド そんなこと、どうしてわかります？

大尉 なに？ わからない？

ネイド はい、まあ、男には結局のところわからないことなんで、これは。

大尉 じゃ、おまえだけじゃなかったのか？

ネイド いいえ、あのときは自分だけで。ですがこういうことになる、誰も自分一人だけかどうかかわからないものでして。

大尉 おまえはルードヴィに罪を着せようというのか？

ええ、そういうつもりなのか？

ネイド 誰の罪だなんて、そう簡単には――

大尉 そう、だがおまえはエムマに結婚の約束をしたらう。

ネイド そんな約束ぐらい、いつだってできますでしょう――

大尉 (牧師に) なんてことだ！

牧師 昔からちつとも変わらない話さ！ しかしね、ネイド、自分が父親かどうかぐらい、おまえにはわかつているはずだろう。

ネイド はい、自分もぜんぜん関係がないとは申しませぬ。でも、牧師様もご存じでございましょう。だからと

申して、必ず子供ができるというわけでもないじやございませんか！

牧師 いいかね、おまえ、おまえ自身のことなんだよ、これは！ おまえだって、あの娘を赤ん坊と一緒にほっぽり出していいとは思ってないだろう？ 無理に結婚しろとは言えないが、しかし、赤ん坊の面倒はみなくちゃいけない！ いいかね！

ネイド はい、でも、それなら、ルードヴィも同じで——大尉 じゃあ、裁判所行きだ！ 俺にはもうわからん。それにこんなことは性に合わん。いいから出て行け！

牧師 ネイド、一言だけ！ ふん！ おまえはあの娘に赤ん坊を背負わせておいて気ががめないのかね？ 本当に、少しも？ ええ？ こんなことをしておいて、おまえはぜんぜん——ふん、ふん。

ネイド もちろん、自分が赤ん坊の父親だとわかつているからです。ですが、金輪際わかりっこないんで、牧師様。もしかして、一生他人の赤ん坊のためにあくせく働くなんてことになったら、あんまり面白いもんじやございませんでしよう！ 牧師様もよくおわかりじやございませんか。大尉殿もそれはよく！

大尉 出て行け！

ネイド ご機嫌よろしゅう！ (去る)

大尉 もう台所へは足を踏み入れるな、このろくでなし！

第三場

大尉と牧師。

大尉 どうして、しめつけてくれなかったんです！

牧師 ええ？ 不足かね？

大尉 ああ、ただそこにすわってもぐもぐやってただけじゃありませんか！

牧師 正直なところ、何て言ってもいいかわたしにはわからないよ。娘はかわいそうだ、たしかに。だが男もかわいそうだよ。本当に父親じやないかもしれないんだからね！ 娘は育児の家で四か月赤ん坊に乳を飲ませれば済む。そのあと赤ん坊は一生世話してもらえ。しかし男には乳はやれないからね。娘はそのあとでも、どこかもつという家で仕事を見つけられるだろう。しかし男の将来はどうなる、もし聯隊から追放されでもすれば。

大尉 ええ、まったく、この一件を、裁判官になって裁いてみたいものですよ。あの男がまったくの無実だとは思えません。それは誰にもわかりっこないことです。でも一つだけはっきりしていることがありますよ。もし誰かに罪があるとしたら、それはあの娘だということです。

牧師 ああ、ああ。わたしは誰も裁かない！　ところで、

この有難い事件に邪魔されたのは、たしかベルタの堅信式の話だったね。

大尉 ええ、実を言うと堅信式というより、あの子の教育全体のことなんです。この家には、あの子を自分の思い通りにしたがる女が多すぎるんですよ。お義母さんは靈魂派、ラウラは芸術家、家政婦がメソヂイストと言えば、乳母のマルグレートはバプティスト。それに女中たちまで混じって救世軍がいいといった具合なんです。そんなつぎはぎのやり方で人間を育てるわけにはいかないじゃないですか。しかも、あの子の人格形成に一番発言権のあるはずのわたしの言うことは、いちいち反対されるんです。あの子をこの家からつれ出したほうがいいというのはそれが理由なんですよ。

牧師 きみの家には口出しする女が多すぎるね。

大尉 そう、そうなんです！　まるで虎の檻のなかにいるみたいですよ。あいつらは鼻の下に真赤にやけた鉄棒をさし向けていないと、いつなんどき襲いかかってきて引き裂いちゃうかわからない！　ええ、ええ、笑ってますね。いやな人だ。わたしはあんたの妹を妻にしたいだけじゃ済まなくて、あんたの年とった継母まで押しつけられたんですからね。

牧師 いや、何といったって、人は継母と一緒に住むもん

じゃないよ。

大尉 そう、しかし、義理の母親ならいいというんでしょう、それが他人の話である限りはね。

牧師 まあまあ、人は生きている限り、何かの負担は背負わなくちゃ。

大尉 しかしわたしの分はあんまり重すぎますよ。それにわたしには昔からの乳母までついているんです。あの子はわたしを、まだ前かけ垂らした子供だと思っている。そりゃあ、優しい女ですよ。だからといって、この家になくちゃならんというわけはないでしょう！

牧師 女たちを上手くあやつらなくちゃ、ね、きみは女たちの言いなりになってるんだ。

大尉 ねえ、義兄さん、女の扱い方ってものがあつたら教えて下さいよ。

牧師 正直言うとラウラはね、わたしの妹だが、扱うのにはちと骨の折れる女だよ。

大尉 ラウラには欠点もあるでしょう、しかし彼女のごことは大したことじゃ。

牧師 いいさ、いいさ、あれのことならわかってるんだ。

大尉 あれはロマンティックな思想を植えつけられて育つたものだから、自分を直視するのがややむずかしいんです。でも彼女はわたしの妻ですし……

牧師 妻だからすぐれているってわけかね！　いいや、き

みが一番苦しめているのはあれだろう。

大尉 それはそれとして、今、家じや一騒動起きているんですよ。ラウラはどうしてもベルタを手離そうとしない。しかしこんな氣違ひ館にあの子をおいておくわけにはいかないでしょう。

牧師 なるほど、ラウラは承知しない。いいかね。そうなると事は最悪だね。子供の頃、あれはよく死んだ真似をしてね、ほしいものを手に入れるまで頑張ったものだ。ところが、手に入れたとたん、すぐに返してしまふんだよ。本当にほしかったんじやなくて意地を通したかっただけだと言つてね。

大尉 へえ、小さいときからもうそんなだったんですか？ 實際、あれは時々すごいヒステリーをおこすんで恐くなるんです。病氣じやないかと心配になつてね。

牧師 で、きみはどう考えてるんだね、ベルタのことを。同意されないんなら、妥協の余地はないのかね？

大尉 あの子を天才にしようとか、わたしに似た子に育てようとか、そんなことを考えているとは思わないで下さい。わたしは、あの子を男に取り持つ女衞役にはなりたくないんです。結婚のためだけに教育するのはいやなんです。結婚しないままじや、そりや、つらいでしょうけどね。しかしだからといって、あの子を男の職業につける氣もないんです。そのためには長い訓練が必要で

しょうが、そんなことは結婚してしまえば、それきりですから。

牧師 じや、どうしたいのかね？

大尉 教師がいいと思うんです。そうすれば、結婚しない場合でも自活できるし、給料を家庭につき込まなくちゃならない普通の教師より悪い生活にはならないでしょう。あるいは、結婚したときでも、子供の教育に役立ちます。いい考えじやありませんか？

牧師 うん！ だけど、あの子には画家の才能があるんだらう。自然の才能を抑えつけてしまつていいのかね？

大尉 いや、わたしはあの子の描いたものを、ある著名な画家に見せたんですよ。そうしたら、学校で習つていればこれくらい誰でも描けるんだそうです。それなのにこの夏、絵のわかるという知つたかぶりの若造が来て、あの子を天才だとかなんとか。それでラウラの思うように決められてしまつたんですよ。

牧師 その男はあの子に惚れていたのかね？

大尉 もちろんだと思います。

牧師 じや、神のご加護あれだよ、きみ。救いはないね。まあ、うんざりだな。ラウラの味方ばかりだらうしね、当然——向こうにいるのは。

大尉 ええ、間違ひなくね！ 家じゆう蜂起してますよ。ここだけの話、あそこでたくらんでいるのはどうみても

正々堂々たる戦い方じゃありません。

牧師（立ち上がる）わたしが知らないと思うのかね？

大尉 あんたも、同じ？

牧師 同じ？

大尉 いや、もっとも悪いのは、わたしの見るところ、あれたちがベルタの将来を決めるのに憎しみを動機としていることなんです。あれたちは女が何でもできることを、男に見せてやりたいと、そればかりを願っているんです。男対女、何事にもね——もう行くんですか？ 晩までいらして下さいよ。どんなもてなしができるかわかりませんが、とにかく。わたしは新しい医者を待っているんです。会ったことはありませんか？

牧師 ちょっとね。通りすがりに。なかなか感じのよさそうな男だよ。

大尉 そう、それは結構。わたしの味方になりそうですか？

牧師 わかりやしないよ。女について、どれくらいよく知っているかによるね。

大尉 ああ、しかし、いてくれませんか？

牧師 ありがとう。晩には戻ると家内に言ってきたんでね、帰らないと心配するだろう。

大尉 心配？ 怒ることでしょう！ まあ、お好きのように。オーバーをどうぞ。

牧師 今晩はずいぶん冷えるね。どうもありがとう。体に氣をつけたまえ、アドルフ。なんだか、焦らだつてるよに見えるよ！

大尉 焦らだつてる！

牧師 ああ、具合がよくないのかい？

大尉 ラウラがつぎ込んだんですか。あれはここ二十年來、わたしを死にかかったも同然に扱ってききましたからね。

牧師 ラウラ？ いいや、しかし、きみを見ていると心配になるよ。氣をつけたがいい。それがわたしの忠告だ！ さようなら！ そうだ、きみが話したかったのは堅信式のことじゃなかったのかね？

大尉 いいえ！ 大丈夫、決められた道を行いますよ。お役所どころの良心ってやつに従うまでです——わたしは真実の証人にも殉教者にもなる氣はありませんから。そんなことは昔のことです。さようなら、奥さんよろしく！

牧師 さようなら、アドルフ。ラウラによろしく！

第四場

大尉、次にラウラ。

大尉（机にすわって、数える）三十四—九—四十三—七一—八—五十六。

ラウラ（戸口で）済みませんが……

大尉 すぐだ！——六十六—七十一—七十四—八—九—九十二—百。何だね？

ラウラ お邪魔のようね——

大尉 いやいや！ 勘定の払いか？

ラウラ ええ、勘定の払い。

大尉 勘定書をおいていってくれ。見ておくから。

ラウラ 勘定書？

大尉 そうだ！

ラウラ 勘定書があるんですの？

大尉 もちろん勘定書がある。家の経済状態は不安定だからな。いざというときの交渉には勘定書を見せなくちゃいけない。そうしないとふしだらな債務者として罰を受ける。

ラウラ 経済状態が悪いのは、あたくしの責任じゃないわ。

大尉 それは勘定書を見ればわかる。

ラウラ 小作人が借用料を払わないからって、あたくしの責任じゃないわ。

大尉 あの小作人を熱心にすすめたのは誰だ？ おまえだ！ なぜおまえはあんな——うん——ぐうたらな男を

すすめたんだ？

ラウラ なぜあなたはぐうたら男を採用したの？

大尉 おまえたちの言うとおりにしなければ、ゆっくり飯を食うことも、眠ることも、仕事をすることもできなかったからだ。おまえはあの男を採用したがつた。なぜならおまえの兄さんがあの男から手を引きたがつていたから。お義母さんもあの男を採用したがった、俺が望んでいなかったから。家政婦も採用したがった、あの男がピエティストだったから。年取ったマルグレートはあの男のお祖母さんと幼馴染だったから。だからあの男は採用された。もし俺が同意しなかったら、今頃は気狂い病院に放り込まれているか墓場で横になっているかしているだろう。さあ、勘定の払いとおまえの小遣いだ。あとで勘定書を持ってこいよ。

ラウラ（うやうやしく）どうもありがとう！——ところであなとも、家事以外の費用の勘定書はとってありますの？

大尉 おまえの知ったことじゃない。

ラウラ ええ、そうね。子供の教育と同じにね。殿方は今晚の会議で何か結論が生まれて？

大尉 俺の結論はとうに出ていたさ。だから、俺と家族の共通の友人に打ち明けたまでだ。ペルタは町で下宿をする。二週間したらこの家を出るんだ。